

弥生墳墓に見る社会構造(1)

－丹後地域－

福 島 孝 行

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

弥生墳墓に見る社会構造（1）

－丹後地域－

福島孝行

1. はじめに

丹後地域の弥生時代社会構造に関する研究は、釋龍雄の弥生墓制研究を引き継いだ肥後弘幸により進められてきた。しかし肥後の論じる弥生社会は、1970年代から80年代の方形台状墓論^(注1)の影響と、都出比呂志の農業共同体論^(注2)の影響を色濃く受け、丹後・但馬地域の遺構の観察に立脚した実証的な研究と呼ぶには不十分なものであった^(注3)。

1990年代から2000年にかけて丹後地域で大型の弥生墳墓が発掘調査されたことを契機に、多くの研究者が丹後地域弥生墓制の研究に参入し数々の実証的な研究が成果を上げる中、筆者も階層制、副葬品、墳形、葬制などについて検討してきた。小稿は、それらを基に自然科学的な研究に導かれながら弥生時代社会構造に迫ることを目的とする。

2 副葬品にみる性差

(1)はじめに

副葬品と性差についての研究は、主に古墳時代を中心として行われてきた^(注4)。また、弥生時代では九州島の貝輪など、遺存人骨の事例が多いものに偏重^(注5)しており、副葬品全体を見渡した研究は行われてこなかった。本稿は、丹後・但馬地域の実例を元に、特に女性に伴う副葬品を抽出する目的で検討を行う。

(2)研究史抄

清家章は、古墳時代前中期の人骨遺存例に着目し、鉄製武器類のうち、刀剣類、鉄鏃の多くが男性人骨と共伴し、女性人骨と共伴する事例は少ないことを指摘した^(注6)。特に鉄鏃の男性人骨に対する副葬率は97%に上り、ほぼ男性に伴う副葬品であることを突き止めた。続いて弥生時代までその検討範囲を広げ、この傾向は変わらないことを論証した^(注7)。

丹後地域では、肥後弘幸が比較的副葬品が多く出土した弥生後期墳墓群を分析し、副葬品間の共伴関係から、鉄製武器類は男性に伴い、玉類は女性に伴う可能性が高いとした^(注8)。さらに三坂神社墳墓群など厚葬墓が含まれる事例を元に自説を補強している^(注9)。

肥後の検討は概ね清家の説と整合的だが、方法論がその時点で判明している事例を網羅的に集成した上で検討する帰納的な実証的考古学の方法とはなっておらず、検証する必要

がある。本節の目的は、丹後地域の実例を網羅的に集成し、実証的に丹後地域弥生時代後期社会の構造の内、副葬品にみられる性差を検討することである。

(3)資料の集成と検討の方法

今回の検討は、丹後地域及び但馬地域の報告書や市町村史等で公開されている、埋葬施設の記述がある弥生時代後期の墳墓を集成し、97%男性への副葬が確認されている鉄^(注10) 鏃と、共伴する玉類の状況を検討する。これは、男性に副葬される鉄鏃と排他的関係にある玉類こそが女性に伴う副葬品であることが推測されるためである。その上で90%男性に副葬されている鉄剣との共伴関係も補足的に用いる。

なお、検討の過程で、階層性に伴う要素は、墓壙土量指数を元に検討し、年齢階梯に伴う要素については土器棺^(注12)、木棺規模^(注13)を用いる。

(4)資料の実例と検討

鉄鏃副葬のみられる丹後地域の40例の埋葬施設の内、玉類が副葬されていた事例は8例を数え、20%の共伴が認められることとなる。鉄鏃副葬の被葬者が男性であるとすれば、男性の2割は何らかの玉類を副葬されていることとなる。

左坂16号墓第2主体部では、鉄鏃と137点のガラス小玉が共伴している。同じ左坂墳墓群17号墓第1主体部からは、鉄鏃と176点のガラス小玉が共伴している。左坂1号墳下層墓第10主体部では、鉄鏃と165点のガラス小玉が共伴している。

弥生時代後期の前半代に属するこれらの事例に共通するのは、鉄鏃と共伴する玉類は、ガラス小玉、それも137点から176点と比較的まとまった範囲の点数に集中する事である。当該期のガラス小玉の長さは、概ね2.0～3.5mm程度であり、中央値の2.7mmで単純に掛け算すると、37cm～48cmの連を想定する事ができる。現代日本人男性の首回りは経済産業省の平成16～18年の日本人の調査によると36～38cm前後^(注14)であるため、想定される連は概ね首元に一回りするだけの長さに相当する。

大風呂南1号墓第1主体部では、鉄鏃4点と272点の緑色凝灰岩製管玉を副葬している。10点のガラス勾玉も出土した。管玉の長さの中央値の1cmでみると、272cmを測り、6連程度に復元できる。このような大量の玉類や、多種の玉によって構成される頭飾りや耳飾り、特殊な構成の玉飾りなどをどう考えるべきか。

丹後の墓壙土量指数 20m^3 以上の最上位階層に属する被葬者は、特別な装身具を身に纏っていた可能性が、三坂神社3号墓第10主体部(水晶製算盤玉16、ガラス勾玉1、ガラス管玉13、ガラス小玉10からなる特殊な垂飾)、浅後谷南墳墓第1主体部(ガラス勾玉5、ガラス小玉350点以上からなる頭飾りと石製管玉2点以上からなる耳飾り)、赤坂今井墳丘墓第4主体部(ガラス管玉3種、ガラス勾玉2種、石製管玉からなる頭飾りと石製管玉、小型

勾玉からなる耳飾り）、坂野丘墳墓第2主体部（ガラス勾玉6、ガラス小玉500点以上、石製管玉326点）の事例から推測される。こうした上位階層の被葬者に対する副葬の場合、三坂神社3号墓第10主体部と大風呂南1号墓第1主体部で鉄鏃を共伴する事例があることから、被葬者には男性と考えられる人物は一定程度含まれ、性差を検討するには不向きである。

このほかに、ガラス管玉が1点だけ単独又はガラス小玉の首飾り1連とセットで鉄鏃と共伴する事例が3例ある。従ってこのセット関係は男性の装いであった可能性がある。

まとめると、男性に副葬される鉄鏃と玉類との共伴関係の検討から、137から176点までの比較的まとまった範囲に鉄鏃との共伴がみられ、男性に副葬されるガラス小玉は、1連程度の首飾りが男性にも副葬される玉類であることを推定した。また、玉類の種類に関わらず1点から数点程度のある種ペンダントトップのような使用法が推測される玉類とは鉄鏃の共伴が認められる事から、男女共有の装身具として認められていたことがうかがわれる。同様に1連の首飾りに還元できるガラス小玉に1から数点の石製管玉をペンダントトップ状にあしらう首飾りについても比較的鉄鏃との共伴がみられることから、男女共有

表1 鉄鏃・銅鏃を副葬した墓から見た玉類の副葬関係一覧

遺跡名	墳墓名	主体部名	墓体積指数	時期	ヤリガナ副葬配置	鉄鏃・銅鏃副葬配置	鉄鏃型	鉄刺副葬配置	ガラス小玉	ガラス管玉	ガラス勾玉	石製管玉	石製勾玉	その他の特徴
大風呂南墳墓群	1号墓	第1主体部	65.9	大山新		1AL-c上	III-a類 III-b類 IV-a類 IV-c類	1AR-h上 1AL-h上 1AR-c下 1AR-l下				10	272	有鈎銅刺・貝輪・ガラス刺・ヤス
三坂神社墳墓群	3号墓	第10主体部	43.7		1AR-h	1AL-c下			10	13	1			黒環銅鉄刀1AL-c下、産塗杖状木製品 水晶製管玉16
内和田墳墓群	5号墓	SX01	14.6	清後谷第1		2a-h								鉄刀1AR-c下
大風呂南墳墓群	1号墓	第2主体部	11.3	大山新～古天		1AR-c上	III-a類	1AR-c下 1AL-h上						鑿1BL-h
金谷1号墓		第15主体部	11.3	西谷	1AL-b下	3-h	折掘	1AL-b下						
左坂墳墓群	16号墓	第2主体部	9.4	三坂新	1AR-h上	1AL-b上			137					小玉は頭部・両腕部から出土
左坂墳墓群	32号墓	第3主体部	8.6			1AL-l								
三坂神社墳墓群	3号墓	第3主体部	8.2		1AL-l	1AR-l下								不明鉄製品2片-l
三坂神社墳墓群	4号墓	第5主体部	8.1			1AL-h/b下								刀子1AR-c下
左坂墳墓群	26号墓	第3主体部	7.7		1AL-b下	1AL-b上								銅鑄片
三坂神社墳墓群	3号墓	第1主体部	7.7		1AR-h下	1AL-c下								
左坂墳墓群	26号墓	第2主体部	7.2			1AR-b上								鉄刀1AL-b下
三坂神社墳墓群	4号墓	第1主体部	7.2			不明			171	1				
左坂墳墓群	1号墳下層墓	第9主体部	6.8	大山古	1AR-h下	1AL-b下	1-b類	1AL-b下						
左坂墳墓群	35号墓		5.4			1AR-l下			90					
左坂墳墓群	1号墳下層墓	第5主体部	5.3	大山新		1AL-h	1AL-b下							鉄刀1AL-b下
左坂墳墓群	24号墓	第20主体部	5.1	大山古	1AL-c	1AL-c中								
左坂墳墓群	25号墓	第1主体部	4.9	大山新		1AL-l下								
左坂墳墓群	17号墓	第1主体部	4.7	大山古	1AR-h	1AL-b			176	1				
左坂墳墓群	1号墳下層墓	第10主体部	4.6			1AL-l下			195					
内和田墳墓群	4号墓	主体部	4.5			銅3-h	II-b類?	2yl-c						
内和田墳墓群	32号墓	第1主体部	4.2			1AL-b上								棺外周小口墓填道を溝状に掘込む
内和田墳墓群	5号墓	SX12	3.7			2yC-h								
古天王墳墓群	5号墓	第9主体部	3.6	古天王新		銅2β-c	III-a類?	1AL-h						
左坂墳墓群	1号墳下層墓	第13主体部	3.3	大山古		1AR-h上								
今市墳墓群	1号墓	第1主体部	2.8	三坂古	1AR-l	1AL-h								報告では不明鉄製品
大山墳墓群	3号墓	第1主体部	2.7	大山新		1AR-c下					1			
赤坂今井墳墓		第7主体部	2.5		1AR-h下	1AR-h下								鉄刀1AR-h下 刀子・鍔弁・黒環銅刀子・鉄片 いずれも墓填上から墳墓状態で出土
金谷1号墓		第10主体部	2.5				3-b類?	1AR-h 3						
大谷遺跡		第3主体部	2.4	大山古		2a?								
左坂墳墓群	1号墳下層墓	第15主体部	2.4			1AR-c上								
左坂墳墓群	26号墓	第4主体部	2.3		1AR-h	1AL-b上								
左坂墳墓群	25号墓	第16主体部	2.1	大山古		1AL-b中								
大山墳墓群	5号墓	第1主体部	1.7	大山古		2a								
大山墳墓群		周辺第18主体部	1.5	大山	1AR-b	1AR-b上								
大山墳墓群		周辺第17主体部	1.4	大山新		2BR-c		銅1AC-l						
左坂墳墓群	32号墓	第2主体部	0.9			1AR-h								
左坂墳墓群	24号墓	第14主体部	0.8			1AL-c								
左坂墳墓群	1号墳下層墓	第11主体部	0.7			1AL-l								
玉神墳墓群	2号墓	第1主体部	0.0		1AR-c	1AR-c								

の装身具であったことが推測される。

(5)女性に副葬される玉類

前節では、男性にも副葬される玉類について検討してきた。では女性専用副葬される玉類とはどんなものかを検討するため、鉄鏃と全く共伴しない、排他的な関係にある玉類

表2 玉類を副葬した墓から見た鉄鏃・銅鏃副葬関係一覧

通称名	墳墓名	主体部名	墓体積 指数	時期	ヤリガンナ 副葬配置	鉄鏃・銅鏃 副葬配置	鉄刺類型	鉄刺副葬 配置	ガラス 小玉	ガラス 管玉	ガラス 勾玉	石製 管玉	石製 勾玉	その他の特徴
浅井谷溝墳墓		第1主体部	48.6	西谷	1AR-h		III-b類		280<			5	2	小型環状鉄製品・頭飾り 百飾り
三坂神社墳墓群	3号墓	第10主体部	43.7		1AR-h	1AL-c下			10	13	1			黒曜鉄刀1AL-c下。 漆塗杖木製品 水晶製管玉16
坂野石溝跡		第2主体部	24.8	浅井谷南1				1AR-h	500			6	326	
左坂墳墓群	16号墓	第1主体部	10.3	大山古					207					
左坂墳墓群	16号墓	第2主体部	9.4	三坂新	1AR-h上	1AL-b上			137					小玉は頸部・両腕部から 出土
三坂神社墳墓群	8号墓	第7主体部	9.2		1AR-h上				63					
三坂神社墳墓群	3号墓	第2主体部	7.4						117	13	2			刀子1AR-c上
三坂神社墳墓群	4号墓	第1主体部	7.2				不明		171	1				
左坂墳墓群	26号墓	第1主体部	7.1						168	3	2			刀子1AR-h上
左坂墳墓群	25号墓	第9主体部	6.9	大山古					182		1			
左坂墳墓群	17号墓	第4主体部	6.8	大山古					79		15			
左坂墳墓群	14号墓	第2主体部	6.0	大山新					568					
三坂神社墳墓群	4号墓	第4主体部	5.8						90					
左坂墳墓群	35号墓	第1主体部	5.4			1AR-I下			108					
三坂神社墳墓群	8号墓	第6主体部	5.3						259					小玉は頸部・両腕部から 出土
左坂墳墓群	17号墓	第6主体部	5.0	三坂新					453		4			
三坂神社墳墓群	8号墓	第3主体部	4.9						176	1				
左坂墳墓群	17号墓	第1主体部	4.7	大山古	1AR-h	1AL-b			82					
左坂墳墓群	15号墓	第6主体部	4.7	大山新					195					
左坂墳墓群	14号墳下層墓	第10主体部	4.6			1AL-I下			62				3	刀子1AR-h
左坂墳墓群	15号墓	第12主体部	4.6	大山新					45					
左坂墳墓群	14号墓	第1主体部	4.5	大山新					92					
左坂墳墓群	15号墓	第11主体部	4.1	大山古					251					
左坂墳墓群	14号墓	第4主体部	4.1	大山古					88					
左坂墳墓群	14号墳下層墓	第8主体部	4.0	天王					72					
左坂墳墓群	15号墓	第1主体部	3.8	三坂新					178					
今市墳墓群	2号墓	NW-2主体部	3.7						300<			3,21<		小型環状鉄製品2
金谷1号墓		第3主体部	3.7						1			1	3	
大山墳墓群	8号墓	第2主体部	3.5	大山新					148					
左坂墳墓群	16号墓	第4主体部	3.4	三坂新					300					
左坂墳墓群	26号墓	第9主体部	3.3						288					
左坂墳墓群	25号墓	第5主体部	3.2	大山新					72					不明鉄製品1AL-h
三坂神社墳墓群	8号墓	第8主体部	3.2						35					
大山墳墓群		南辺第7主体部	3.1	大山					535					
左坂墳墓群	14号墓	第6主体部	3.0	大山新					124					
左坂墳墓群	17号墓	第2主体部	3.0	大山古	1AR-h				197					
三坂神社墳墓群	3号墓	第4主体部	2.9						176				18	
大山墳墓群		南辺第11主体部	2.8	大山					142					
左坂墳墓群	14号墓	第13主体部	2.4	大山新					504					
左坂墳墓群	25号墓	第11主体部	2.3						6					
左坂墳墓群	25号墓	第13主体部	2.1	三坂					202					
三坂神社墳墓群	3号墓	第14主体部	2.0						162	1				
左坂墳墓群	24号墓	第8主体部	1.9						438	1			24	
左坂墳墓群	26号墓	第8主体部	1.7						18					
左坂墳墓群	25号墓	第14主体部	1.7	三坂					40				4	
大山墳墓群		南辺第9主体部	1.5	大山新	1AR-I				102				4	
左坂墳墓群	25号墓	第5主体部	1.5	大山古					7					
左坂墳墓群	24号墓	第6主体部	1.4						343			4		
左坂墳墓群	24号墓	第9主体部	1.4	大山新	1AR-h				477					
左坂墳墓群	31号墓	第1主体部	1.4	大山新?	1AR-h?				167					
三坂神社墳墓群	4号墓	第3主体部	1.4						190					小玉は頸部(管玉)・両腕 部(管玉)から出土 小玉は頸部・両腕部から 出土
三坂神社墳墓群	3号墓	第5主体部	1.0						242					
左坂墳墓群	16号墓	第6主体部	0.9						40<					2 墓塚1 滑石6
左坂墳墓群	16号墓	第9主体部	0.9	大山新					11					
金谷1号墓		第11主体部	0.9						7					
今市墳墓群	2号墓	S-10主体部	1.1	三坂新					48					
左坂墳墓群	15号墓	第5主体部	0.8						3					刀子1AR-h上
今市墳墓群	2号墓	S-14主体部	0.7	三坂古	1AR-h				7					
左坂墳墓群	25号墓	第15主体部	0.7						84					
左坂墳墓群	24号墓	第10主体部	0.7	大山古					17			2		
三坂神社墳墓群	8号墓	第10主体部	0.7						11					
左坂墳墓群	17号墓	第8主体部	0.7	三坂新					192					
大山墳墓群	5号墓	第2主体部	0.6	大山古					2					
左坂墳墓群	25号墓	第8主体部	0.6						55					
左坂墳墓群	24号墓	第5主体部	0.6	大山新					171					
今市墳墓群	2号墓	S-8主体部	0.5	三坂新					29					
左坂墳墓群	14号墓	第3主体部	0.5						69					
三坂神社墳墓群	8号墓	第1主体部	0.4						11					
左坂墳墓群	26号墓	第7主体部	0.3						54					
左坂墳墓群	14号墓	第2主体部	0.3						235					
左坂墳墓群	24号墓	第2主体部	0.3	三坂古					79					
左坂墳墓群	24号墓	第1主体部	0.2						197					
左坂墳墓群	26号墓	第6主体部	0.2						11					
左坂墳墓群	14号墓	第11主体部	0.2						6					
三坂神社墳墓群	8号墓	第13主体部	0.2						105					
今市墳墓群	2号墓	S-12主体部		三坂新	1-h									

を検討する。

三坂神社3号墓第14主体部のガラス小玉202点や今市2号墓S-18主体部ガラス小玉235点などガラス小玉200点前後から、左坂26号墓第9主体部ガラス小玉300点などガラス小玉300点前後で構成される首飾りは、鉄鍬と共伴しない。これはガラス小玉に紐を通して首飾りにした場合、長さが67cm～80cmとなる長さとなる。実際には多少の小玉同士の間に遊びがなければ首飾りにはできないため、若干長い全長となるとみられる。

経済産業省の平成16～18年の日本人の調査^(注15)によると、成人男性の首周りの長さは36～38cm、女性は31cm前後である。弥生時代に日本列島に生きていた人々が同じ首径だったかは不明だが、この値を用いると、このガラス小玉の首飾りは、2連の首飾りであったことを想定できる。300～500点前後で構成される首飾りも鉄鍬と共伴しない。350～360点前後から3連で使用することが可能となり、500点では4連の首飾りを構成可能となる。

これに対し、前節で述べた通り、1連の首飾りは男女とも使用される首飾りである。

また、多種・多量の玉類を使った特殊な装飾品は階層の高い被葬者のみ許された副葬品であり、この場合は三坂神社3号墓第10主体部での鉄鍬の共伴例に見るように男性にも副葬され、男女の性差は考慮されないとみられる。

以上から女性にのみ副葬されるのは2連以上で構成される首飾りであると推定される。

なお、200点以上のガラス小玉、即ち2連以上の首飾りを副葬品に持つ被葬者は、墓壙土量指数20m³以上の高階層を除き、鉄剣を副葬されない。このことも、2連以上の首飾りは男性には伴わないことを示している。

ガラス勾玉は、墓壙土量指数20m³上位の階層にのみ副葬される多種・多量の玉類を使った特別な装身具を除けば、鉄鍬と共伴しない。従ってガラス勾玉を含む装身具は、女性を示す可能性がある。

時間軸に沿って見ると、鉄鍬が玉類と共伴するのは大風呂南1号墓までであり、後期後葉から末葉(庄内式併行期)は、玉類と鉄鍬が共伴した事例はない。したがって弥生時代後期後葉から末葉に限ってみるなら玉類は女性特有の副葬品である可能性が高い。

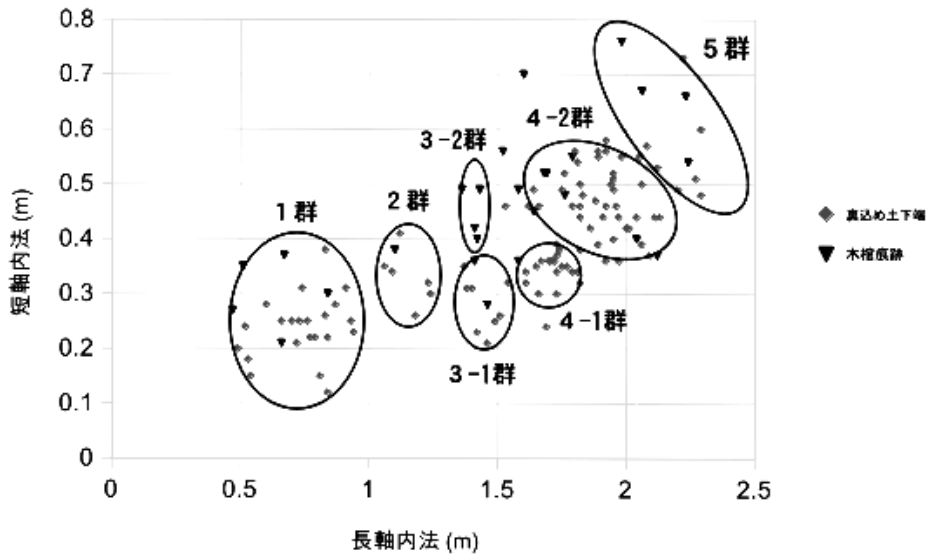
3 木棺の法量と年齢階梯

(1)はじめに

木棺と年齢の相関については、経験則に基づいて、成人棺、小児棺などと報告されてきた。これを弥生時代中期の事例から藤井整が遺存人骨を伴うものを抽出し、木棺法量と埋葬年齢^(注16)について考察した。

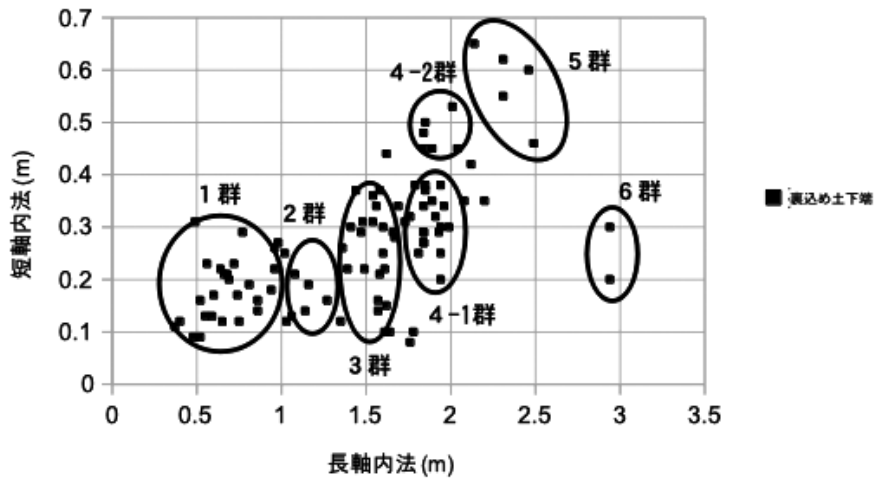
藤井の検討は弥生時代後期の事例を含まないため、本節では弥生時代後期の丹後・但馬

H形組合式箱形木棺内法



第1図 H形組合式箱形木棺法量分布図

箱形木棺の内法



第2図 箱形木棺法量分布図

地域の事例を検討する。

（2）検討の方法

木棺の法量と年齢階梯の関係を検討するにあたり、予め資料操作に用いる数値について整理しておく必要がある。それは、発掘調査報告書に記載される木棺法量には、様々な計測方法があり、統一されていないのが実態だからである。なぜなら1800年以上前に製作された木製の棺は、腐朽によって消失し、多くの場合痕跡を検出することが困難となる。そのため木棺については、土層断面に残る裏込土の痕跡、平面的に観察される裏込土と棺内流入土との境界、木棺が腐植する過程で周囲から流込み、木棺と置き換わる微細な砂粒、墓壙底や墓壙壁に掘り込まれた長側板や小口板を固定するための溝などから間接的に得られる情報により検出され、それを最大限漏らさずに報告書に記述する配慮がなされているからである。このため、木棺法量の記述は、木棺の外法として長側板の長さ、両小口板の外側の距離、内法として両長側板の内側間の距離、両長側板の内側間の距離などが、遺構の検出状況により使い分けられている。

今回の検討では、木棺痕跡から直接的に木棺の法量がわかる場合、残存状況に応じて木棺小口板間の距離を長軸、長側板間の距離を短軸として採用した。また、木棺を固定した裏込め土下端により小口板の外方間の距離を長軸、箱形木棺の場合は長側板の外法間の距離を短軸、H型組合せ式箱形木棺の場合は極力長側板の内法間の距離を短軸とした上で、外法の数値から長側板の平均的な厚みである $0.08\text{m} \times 2$ の 0.16m 、小口板は木棺長軸 1m 未満は $0.07\text{m} \times 2$ の 0.14m 、長軸 $1\text{m} \sim 1.4\text{m}$ 未満は $0.08\text{m} \times 2$ の 0.16m 、それ以上は $0.1\text{m} \times 2$ の 0.2m を差し引いた値で内法を推定し、グラフに表示した。これは、年齢階梯は、弥生時代後期の葬法が一般的に伸展葬と推定されていることを前提とすれば、遺体の身長や肩幅との合理的な関係性に現れると推定されるため、内法で比較する必要があるからである。

（3）丹後地域の状況

第1図によると、福永Ⅱ型のH形組合式箱形木棺（以下Ⅱ型H形組合式箱形木棺）については、長軸 $0.6 \sim 1.0\text{m}$ 、短軸 $0.2 \sim 0.3\text{m}$ に分布の集中が一つみられる。これを1群とする。

また、長軸 $1.1 \sim 1.3\text{m}$ 、短軸 $0.3 \sim 0.4\text{m}$ に散漫な分布の集中がみられる。これを2群とする。

次に長軸 $1.35 \sim 1.6\text{m}$ 、短軸 $0.2 \sim 0.6\text{m}$ にまとまりがあり、その中に短軸 $0.2 \sim 0.4\text{m}$ のまとまりと、 $0.4 \sim 0.6\text{m}$ のまとまりがみられる。前者を3-1群、後者を3-2群とする。

そして長軸 $1.6 \sim 2.0\text{m}$ 、短軸 $0.25 \sim 0.35\text{m}$ 、 $0.4 \sim 0.6\text{m}$ 、に強い分布の集中がみられる。前者を4-1群、後者を4-2群とする。

このほか長軸 $2.0 \sim 2.7\text{m}$ 、短軸外法 $0.35 \sim 0.8\text{m}$ に散漫な分布がみられる。これを5群と

する。

箱形木棺はⅡ型H形組合式箱形木棺の1群と重なりながら、やや短軸が短めの所に分布の集中がある。

2群ははっきり分布が分かれ、短軸は0.1～0.25mに分布がみられる。

3群はⅡ型H形組合式箱形木棺と分布が重なりながら短軸が0.1mまで分布範囲が広がる。

4群は4-1、4-2群ともⅡ型H形組合式箱形木棺とほぼ重なるように分布するが、4-1群はやや短軸が短いものが含まれる。

5群はほぼⅡ型H形組合式箱形木棺と分布範囲が重なる。

長軸3.1m、短軸0.4～0.5mに2例分布する。これを6群とする。

(4)属性に関するスクリーニング

これらの木棺法量により分類される各群を検討するにあたり、葬制に関するどの属性が相関関係にあるかを検査する必要がある。

まず時期については、6群が浅後谷南2～3式のみで構成されることを除けば、各時期の事例が偏って作られることはない。

階層性については、墓壙土量指数 5 m^3 を越えるものは4-2群、5-2群に分布するものが多数を占める。ただし、一部に 5 m^3 を越えても4-1群であったり、5-1群であるものもあるが、群の中でも比較的短軸が長いものであり、階層と短軸の相関は強い。一方で、 5 m^3 未満の被葬者が4-2群や5-2群の木棺に埋葬されている事例がある。数の上では少数であるため、肩幅など体格を初めとした個別的な事情によるものと推定される。

墳墓群ごとの小地域性あるいは集団ごとの特性については、各群にそれぞれの墳墓群が偏り無く入っているため、小地域性や集団ごとの特性も特にみられない。

これらの検討から各群の内、長軸に年齢階梯が表出されている可能性が高い。したがって以下に年齢階梯と長軸について検討していくこととする。また、階層性と短軸の関係性についても詳述する。

(5)木棺法量に見る年齢階梯と階層性

前節までに指摘した1～6群は、時期的に偏って出現する6群を除き、木棺内法に5つの階梯があり、その法量から、年齢階梯毎に木棺が作り分けられていたことを推測させる。以下にこの推測に対する検証を行う。検証に当たっては、丹後地域と共通の墓制を採用する但馬地域において、人骨を良好に出土した梅田東墳墓群^(註17)の事例を援用する。なお、当該墳墓群は箱式石棺を採用する埋葬施設が多いが、棺の内部空間の規模は木棺と変わらない

とみられるためこの事例を代用するが、今後木棺に埋葬された事例で残存状況が良好な人骨が出土した場合はさらなる検証を行うこととする。

2群は但馬地域の梅田東墳墓群10号墳第5主体部組合式石棺の事例（内法長軸1.05m、短軸0.4m）を参考にすると、小児（3～6歳）の木棺であることが推定できる。石棺と木棺の違いがあり、短絡的に判断することは慎まねばならないが、2群が小児期（3～6歳）の木棺である可能性が指摘できる。さらに日本人の平均的な成長曲線を参照すると、日本人男子の3歳の平均身長が100cm、5歳の平均身長が120cmであり、このことと2群の長軸が1.0m～1.3mの間に分布していることとは、整合的であり、上述の推測を補強する。^(註18)

4群は同じく梅田東墳墓群10号墳第1主体部組合式石棺（長軸1.9m、短軸0.48m）、12号墳第1主体部Ⅱ型H型組合式箱形石棺（長軸1.94m、短軸0.47m）の事例から壮年、熟年（20歳～59歳）の木棺であることが推定される。弥生時代人男性の平均身長が164cm前後、女性の平均身長が150cm前後であり、4群の木棺の長軸が1.6m～2.0mに分布していることと整合的である。

2群が小児棺、4群が壮年から熟年の棺であることが言えるとすれば、1群は2群より若い年齢層の棺であることが推定される。過去に筆者は土器棺の検討をし、それまで2歳以下の小児棺と推定されていた土器棺について、弥生後期においては基本的に死産又は出生後間もなく死亡した遺体を埋葬した棺であると推定した。^(註19) その推定が肯ぜられるのであれば、1群の棺は0～2歳児の棺であることが推定される。参考に日本人男児の2歳の平均身長は85.4～92.7cmであり、出生時の平均身長が45cmであることが、1群の長軸が0.4～1.0mに分布していることと整合的である。

同様に内法長軸が1.35～1.6mの3群は、小児と壮年の間、7～19歳頃、青年期の被葬者が埋葬されていたことが推定される。遺存人骨の例は存在しないが、日本人の男子7歳の平均身長が121cm、19歳男子の平均身長が170cm、同女子の平均身長が158cmであることとほぼ整合している。近年日本人の平均身長が伸びたことを考慮すれば、木棺内法と身長の相関は高いと言える。

ここまでの検討により、年齢階梯による木棺の作り分けは、0～2歳の幼児期に亡くなった被葬者を納める1群、3～5歳の小児期に亡くなった被葬者を納める2群、6歳から19歳の青年期被葬者を納める3群、壮年から熟年期の被葬者を埋葬した4群となることが推定される。3群までは、成長過程に応じて身長と相関のある群に属する法量の木棺に葬られるが、壮年以降は年齢階梯に応じてより長軸の長い木棺に葬られることとなる。

では5群はどうか。ここまで木棺の長軸が年齢階梯と相関関係にあり、短軸が階層性と相関があることを述べたが、5群はその双方の特徴を持っている。5群を構成するⅡ型組

合式箱形木棺は、全て墓壙土量指数 5 m^3 以上の上位階層で占められている。そして年齢階梯としては、熟年期よりも高齢の老年期の被葬者が葬られている可能性がある。

前節のスクリーニングにより、3、4群の内、木棺幅が広いグループ(3-2群、4-2群)は、墓壙土量指数 5 m^3 以上の墓壙が大多数であり、1部の例外を除いて階層が高い被葬者が木棺幅の広い木棺の埋葬されることが推定される。現代日本人の平均肩幅は男子が $45\sim 46\text{ cm}$ 、女子が $40\sim 41\text{ cm}$ であることを参考^(注20)にすると、墓壙土量 5 m^3 未満の階層に属する被葬者は、概ね肩幅が丁度収まる幅の木棺に埋葬され、 5 m^3 以上の階層に属する被葬者は、遺体の周りに空間ができる幅の木棺に埋葬されていたことが分かる。

5群の被葬者は老年期の被葬者であり、かつ墓壙土量指数 5 m^3 以上の階層に属することが推定される。青年期から熟年期にかけて、階層により木棺を作り分けられていた人々が、老年に達すると 5 m^3 以上の階層に位置付けられ、5群の木棺に埋葬されると推定するのが現在の所穏当な解釈と言える。

組合式箱形木棺も、年齢階梯は原則的にH形組合式箱形木棺と同様に、1～5群の法量により表示される。しかし、組合式箱形木棺は、多くが内法短軸 $0.2\sim 0.4\text{ m}$ の範囲に収まり、4-2、5群に属するものは少数である。このことは、この木棺が墓壙土量指数 5 m^3 未満の低い階層に用いられることが多いことを示している可能性がある。しかし、木棺短軸内法が 0.2 m を切る例が比較的多いことから、木棺内法の想定に一定の誤りがある可能性がある。今回の木棺内法の推定は、主にH形組合式箱形石棺の長側板痕跡を検討資料とし、長側板の厚みを推定し、木棺裏込め土の下端から木棺外法幅を推定してそこから長側板の厚みを差し引くという手続きを取っている。木棺の長側板の厚みの推定法か、木棺の外法の推定法のいずれか又は両方が不正確なのか、あるいは、H型組合式箱形木棺と組合式箱形木棺とでは長側板の厚みに違いがあるのか、いくつか考えられる可能性はあるがその検討は今後の発掘調査で箱形木棺の厚みが分かる良好な事例の集積を待つ必要がある。

4 血縁を中心とした社会

田中良之・清家章によると、弥生時代の墳墓上の埋葬施設には血縁関係があり、同世代であることから、キョウダイの埋葬を原則とするとされている^(注21)。そして、姻族は同一の墳墓には埋葬されず、結婚して出産しても、血族の墳墓に埋葬される^(注22)という。明確な科学的根拠を示して弥生墳墓の血族、姻族の関係を論じたものは他にないため、この論を前提として丹後地域弥生社会の復元を試みる。

また、先述したとおり清家章によると、弥生時代から古墳時代前半期にかけて、鉄鏃は男性に伴う副葬品であり、刀剣類はそれに次ぐ確率で男性に属^(注23)すが、丹後では大谷古墳の

被葬者が女性でありながら鉄剣を副葬されており、必ずしも男性の副葬品であるとは限らない。^(注24)

丹後地域においては、弥生時代から古墳時代にかけて1墓域に多数の墓壙が築かれ、それぞれが切り合いを持つ事例が多い。先の赤坂今井墳丘墓でも墳丘上平坦面に切り合いを持つ墓壙4基、切り合いを持たない墓壙2基を配置している。また、墳丘下部の帯状に巡らされた平坦面にも多数の埋葬施設を配置しており、一つの大きな集団が単一の墳丘墓に埋葬されている。一つの墳丘を共有していることから、田中の説を援用すればこの被葬者群は、単一の血族の墓域と考えることができる。丹後・但馬地域は、同一血族を多数同一墓域内に埋葬する事を特徴とする。^(注25)卓状墓が接続して形成される場合は、同一の血族による造墓と、他の血族による造墓の可能性がある。血族内で階層的に最も上位の人物の死去に際して卓状墓が造墓され、その中心主体として埋葬される。この時、最上位層が男性に限らないことが推定される。金谷1号墓第1主体部の被葬者が女性であることを証明することはできないが、鉄鏃、刀剣といった男性に副葬されることが明らかな副葬品を持たないことがある程度この被葬者が女性であることを示唆する。次に同一平坦面上に中心主体被葬者の兄弟姉妹が僅かに切り合いを持って埋葬される。例外的に、中心主体の子で乳児又は死産だった嬰兒、中心主体とは独立して墳墓を形成することが許されることとなった兄弟姉妹の乳児又は死産だった嬰兒が同一平坦面上に土器棺に納められ、埋葬されるが、前者は切り合いを持ち、後者は切り合いを持たずに配置される。中心主体と切り合いを持って埋葬された兄弟姉妹たちの乳児又は死産だった嬰兒も同様であり、例外的に土器棺に納められ、埋葬される。男性が被葬者であることが明らかな三坂神社3号墓第10主体部や、比較的女性が被葬者である可能性が高い第6主体部と切り合いを持つ土器棺があることから、生まれた子供は、父系、母系いずれにも属しうる双系性の社会であったことが推測される。^(注26)

墓群単位で見ると、墓域の大きな墳墓の中心主体に埋葬された被葬者は、より小さな墓域の中心主体に埋葬された被葬者より階層が高いことが墓壙土量から推定され、同一平坦面に埋葬された被葬者数も多いことが確認できる。このことから、中心主体の被葬者の階層の高さは墳墓や墓域の広さだけでなく、埋葬可能な被葬者数の多寡まで影響を及ぼすとみられる。平坦面の中心主体部、中心主体部と切り合って埋葬中核構造を形成する墓壙群をキョウダイの埋葬施設と見た場合、そこから離れて平坦部の辺縁部に埋葬されるのは、イトコ(祖父又は祖母を共有する同世代の血族)とみられる。また、金谷型台状墓や赤坂今井型墳丘墓では、周辺主体配置用平坦面に墓壙があり、これらは相互に切り合うものもあることから、中心主体部被葬者のイトコのキョウダイであり、平坦面周辺部の被葬者は、

その代表者と想定する事が可能となる。

こうした状況から弥生時代後期の丹後地域の弥生社会は、キョウダイ(兄弟姉妹)を中心とした血族を単位として生活し、生まれてくる子供は父系・母系いずれにも属しうる双系性であり、血族間、血族内に整然とした階層差がある社会であることが窺われる。また、他地域と比較して単独墓が少ないことから、個人の独立性はさほど高くなく、「首長」と呼ばれるような高い階層を獲得した人物であっても、血族と共に葬られ、兄弟姉妹を墓域から排除しない社会であったことが分かる。

男女の間に階層差はなく、時には女性が血族集団の長となることもあったとみられ、その伝統は京丹后市大谷古墳にみるように古墳時代前期末～中期初頭までは少なくとも維持された。

5 おわりに

私は、丹後地域の弥生時代後期社会について、実際に検出された遺構、出土した遺物の観察から、それらの諸属性の何が社会的な現象や構造を表しているのか、約20年にわたって検討してきた。それらの検討を総括し、現時点で丹後弥生時代後期社会をどう位置づけるかの中間まとめが「洛東江流域の原三国時代墓制と丹後・但馬の弥生時代墓制」^(注27)と本稿である。前稿では、丹後・但馬地域弥生時代社会の中期と後期の間で起こった一大変革を朝鮮半島原三国時代における洛東江流域の文化的影響を強く受けた結果であることを論じ、本稿ではこれまで肥後を中心に行われてきた丹後地域弥生時代社会の復元について検証し、血縁を中心とした階層制、性差、年齢階梯の関係性を論じた。

丹後地域はその後古墳時代に降っても血縁者を重んじ、一墳複数(多)埋葬を継続し、卓状墓など弥生時代後期の墓制を継続する。副葬習俗も弥生時代後期と共通する形状の墳墓には弥生時代後期と共通する副葬品を比較的低い階層にも用いられることを「丹後地域前期古墳の規模・墳形に見る階層制と副葬品」^(注28)で論じた。

これらの検討から丹後・但馬地域における弥生時代後期の社会構造が臆気ながら描写できるようになってきた。今後但馬地域での社会構造の検討も進め、さらなる研究の深化を図っていきたい。

(ふくしま・たかゆき = 京都府教育庁指導部文化財保護課主幹)

注1 近藤義郎1977「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号 岡山大学法文学部

注2 都出比呂志1986「6 墳墓」『岩波講座 日本考古学』4 集落と祭祀 岩波書店)

- 注3 肥後弘幸1996「家族墓へのアプローチ－北近畿後期弥生墳墓の場合－」『京都府埋蔵文化財論集』第3集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注4 清家章1996「副葬品と被葬者の性別」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会
- 注5 木下尚子1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学』法政大学出版局
- 注6 前掲註4
- 注7 清家章「女性首長出現の背景」（『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室）
- 注8 前掲註3
- 注9 肥後弘幸2020「墓に葬られた人々－首飾りの所有者が女性だった時代はあるのか－」『難波宮と古代都城』同成社
- 注10 前掲註4
- 注11 福島孝行2000-a「赤坂今井墳丘墓に見る階層制について」『京都府埋蔵文化財情報』第76号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注12 福島孝行2015「丹後地域の弥生時代土器棺墓」『森浩一先生に学ぶ－森浩一先生追悼論集－』同志社大学考古学シリーズⅪ
- 注13 本稿第3節参照
- 注14 経済産業省「size－JPN 2004－2006」
- 注15 前掲註14
- 注16 藤井整2001「方形周溝墓の被葬者－下植野南遺跡の調査から－」『京都府埋蔵文化財情報』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注17 山田清朝2002『梅田東古墳群発掘調査報告書』（兵庫県教育委員会埋蔵文化財報告書 第24冊 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）
- 注18 前掲註14
- 注19 前掲註12
- 注20 前掲註12
- 注21 田中良之1995『古墳時代親族構造の研究』柏書房
清家章2001「古墳時代前・中期における埋葬人骨と親族関係－近畿の資料を中心に－」『弥生～古墳時代における親族構造の考古学・人類学的研究』大阪大学大学院文学研究科
- 注22 清家章2002「古墳時代女性首長の出産歴」『エコソフィア』第9号 民族自然誌研究会
- 注23 前掲註4
- 注24 奥村清一郎ほか1987『大谷古墳』（大宮町文化財調査報告4）大宮町教育委員会
- 注25 福島孝行2003「いわゆる丹後地域方形台状墓概念の再検討」『弥生時代の墳墓と祭祀』京都府埋蔵文化財研究会
福島孝行 2010「卓状墓の展開－丹後・但馬・丹波の独自の墓制－」『京都府埋蔵文化財論集』第6集（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
福島孝行2019「兵庫県内の弥生時代卓状墓」『ひょうご考古』第15号 兵庫考古学談話会）
- 注26 前掲註12

- 注27 福島孝行2016「洛東江流域の原三国時代墓制と丹後・但馬の弥生時代墓制」『京都府埋蔵文化財論集』第7集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注28 福島孝行「丹後地域前期古墳の規模・墳形に見る階層制と副葬品」『京都府埋蔵文化財論集』第5集 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター2006

補注

文中の土器編年は高野陽子 2006「丹後地域－擬凹線文土器の様式と変遷－」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センターによる。

なお、報告書の出典は紙幅の関係上割愛せざるを得なかった。御寛恕願います。